
勇者様と俺。

墜落

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者様と俺。

【Nコード】

N5797E

【作者名】

墜落

【あらすじ】

この世には複数の世界が存在する。この物語の主人公は魔王の第3子であるルイド王子である。そのルイドの敵はなんと、異界からやってくるとされた勇者様だった。勇者を倒さなければ魔界は滅びると言われたルイドは・・・！？

第1話 魔王の話（前書き）

もしかしたら少しグロい表現がでるかもしれませんが。そういうのが苦手な人は読まない方をおすすめします。

第1話 魔王の話

長い長い廊下が続いている。壁にはところどころ苔がはえ、蜘蛛がうろついている。そのうえ薄暗い。光といえば、ぽつぽつと置いてある蠟燭の光だけで、窓がない。地下の廊下は寒く、生身の人間だったら凍え死んでしまうだろう。だが、この俺にはそんなことは関係ない。なぜってそりゃあ、人間じゃないからな。俺の名はルイド・デューク・デイ・アルデルトだ。

この名前を聞いて心当たりがあつた諸君も居たと思う。そう、俺様こそがこの魔国を支配するかのリチャード・デューク・デイ・アルデルト王の第3子、ルイド王子だ。

魔王だからといってなにもこんな地下に住んでるわけじゃねえ。俺がこんな辛気くさい廊下を歩いているのにはある事情がある。

魔王になるためにはいろいろな試験をくぐりぬけなきゃならない。そんな簡単な職じゃないんだ魔王ってのは。まあ、まだ俺は魔王じゃないが、もし上の二人の兄貴が死んだとしたらいずれそうなる。で、魔王になつても支障がでないようにつてことで魔王になるための特別授業がある。それが今から始まるんだがなにせ今ちょっと腹が痛くて・・・いや勉強が嫌いで逃げているわけじゃない。断じて

王子いいい！

ルイド王子様ああ！！

うつわ来やがつた・・・！俺は地下の廊下を走りだす。まったく少しはゆっくり休まないと気が狂うぜ。それにしても今日はなかなかあいつらが諦めて追うのをやめない。へんだな、いつもは1時間もすればやめるのに。おかげでこんな奥まできちまった。こんなにこの地下に入るのははじめてだ。

廊下を走りに走ると比較的小さなドアがあった。黒い鉄のドアで周りは赤いペンキかなにかで塗りたくっている。初めてみるドアだ。すこし戸惑ったが向こうから聞こえる足音に俺はあせった。とつさにドアのノブに飛びついて巻かれてあつた鎖を引き千切る。こんなところで捕まつてたまるか！

俺はドアに入る直前部下どものあせつた声を聞いた。叫び声にも近かったがそれを疑問に思うひまもなく俺はドアの向こうに吸い込まれるように入っていた。

なにかとんでもないことが起きるんだと、ようやく知った。

第2話 勇者の話（前書き）

タイトルからして分かるように勇者sideです。お楽しみください。

第2話 勇者の話

俺、二ノ宮健二、16歳。ばりばりの日本人のただ今高校2年生だ。好きな物はサッカーで、嫌いなものは勉強・絵、嫌いな食べ物は特にない。別に親が金持ちというわけでもなく、かといって貧乏というわけでもなく、たぶん平均的な収入だと思う。家族や親戚がおおきな事故や病気にかかったこともなければ俺自身暗いドロドロの過去を背負って生きているわけでもない。勉強嫌いが頭良いわけなし、人よりとびぬけて運動神経がいいわけでもない。むしろこのごろサッカーしてないからなまってそうだ。とにかく俺がいたいのは、俺は平凡な高校に通う平凡な一般市民だということ。そして俺の願いはこれから何事もなく普通に過ごしたい。生きていきたい。それだけだった。

ああ、俺の切実で単純な願いを、どうして神様は叶えてくれなかったのか。

ちくしょう！神様なんてくそくらえだ！

俺は内心で涙を流しながら、俺の目の前にすわっている小さくて奇妙な、およそこの世のものではないような生き物を眺めた。

まだまだ雨が降り止まぬ6月。梅雨の真っ最中である。今日の体育もサッカーは中止になり、あの暑苦しい体育館に閉じ込められていた。そのことを友達と愚痴りながら下校。家に帰ると母は買い物、父は会社でまだ帰ってきていなかった。

俺は自分の部屋に引っ込んで素直に宿題・・・とかいたら明日はたぶん槍が降るだろう。雨が降っているのに外に行くのはかつたらしいし、それに俺このごろ風邪ぎみなんだよな。ということはいそいそと部屋にしまってたあったテレビゲーム機を取りだしリビングに持

っていく。

部屋にもテレビはあるがリビングの方が大きいし、誰もいないから怒られることもない。最高だ！

それから30分ぐらいはいろんなゲームを適当にやっていたが、みんな飽きてしまった。ああ、やっぱり外で思いっきりサッカーしたい。

テレビゲーム機の電源を切ると俺は唸りながら後ろに倒れこんだ。同じ体勢でいるのにも疲れたし、目も痛いし。寝るかな……。。

「イテッ」

頭が痛い。いや頭痛じゃない。頭になにか当たった。きっと俺が倒れこんだところになにかあったんだろう。

俺はなんでこんなところに置いてんだよ、とぶつぶつ文句をいいながら頭を押さえて起き上がった。

そこにあっしたのはゲームのソフトだった。ああ、これは見覚えがある。昔流行ったRPGのゲームだ。懐かしいな。

俺は興味にかられてそれをゲーム機にセットし、電源をいれた。

これは確か勇者が魔王を倒すためにパーティーを組んで旅をするという、まあいつてしまつとすつごくありふれたゲームだった。当時はそれに夢中になってたもんだが。

だがそこで俺の記憶にないことが起こった。テレビ画面がいきなり真っ赤になったのだ。

あれ？こんな始まり方だったっけ？

しかも変に雑音がテレビから聞こえる。おい。もしかして壊れてんのか？なんだよつまんねえの。

さつさとゲーム機に手を伸ばし、電源を切ろうとした。ん？

また変なことが起こった。電源が切れない。ちよつと待てゲーム機も壊れてんのかよ！？

そこで俺はなんだか怖くなった。だって今の状況考えてみるよ。家に俺一人で外は雨。偶然出てきた昔のソフトをつけてみたら画面が真っ赤になって雑音が聞こえるし、しかも電源が切れない。もしかしてあれか？スプラッタホラーな展開というやつか！？ふざけんな！俺は少し混乱して（チキンとかいうなよ！）テレビから離れた。次に起こったことはまさに目を疑うような、いやむしろ俺の頭を疑うような出来事だった。

テレビの真っ赤な画面の中から小さな足が生えてきた。失礼。出てきた。

次に手、頭、胴体。真っ黒い髪の毛に白い服をきた女じゃない。なんか・・・なんといいいか。

大きい耳に目。しかも頭でつかちで、頭がぐらぐらしている。首から落ちるんじゃないかあれ。

その生き物は俺を見つけると（たぶん）歓喜の声をあげた。

「ああ、いたいた。良かった！もう二度と見つけれないかと思っ
た・・・！」

小躍りしているところ悪いが、俺、叫んでもいいか・・・？

「うわああああ！！！！」

ものすごい勢いで後ずさり、後ろにあったソファーにあたり、そのソファーごとひっくり返る。

なんだコレ、なんだコレ、どうなってんの！

その生き物が襲ってやこないかと怖くなってひっくり返った体勢から必死に立ちあがろうとするが足に力がいらずにへたりこんだ。
うっわ今俺超カッコ悪い。

だが、襲われそうな様子はない。静かなものだった。

ソファ―を盾にしながら恐る恐る様子をうかがう。もしかして今のは幻覚だったんじゃない。それか俺が寝ぼけてただけだったりして。

かすかな希望を頼りに（情けない希望だが）テレビの方に目をやる。やっぱりいる・・・！なんか、変なモノをみるような目で俺をみている。ヤメロ、そんな目でみたいのはこっちの方だよ！ただこっちはまともに正面に立って相手の目をみる勇氣なんて持ち合わせちゃいねえけどな！

そんな俺の心の葛藤も知らずに、ソレは俺にこういった。

「お前、立派な勇者になりたいと思ったことないか？」

第3話 奇妙な部屋（前書き）

今度は魔王 side。たぶんこれからも交互です。ややこしい・・・
ですかね？（汗）

第3話 奇妙な部屋

後ろ手にドアが閉まる重い音が響いた。なにか危険を感じた俺はウターンしてこの部屋を出ようとした。だが、俺の目の前にあったのは鉄の扉ではなく、硬い茶色の薄汚れた壁だけだった。

扉がない・・・！？しまった、出られない！閉じ込められた！

気が動転して壁に駆け寄り叩く。もし向こう側に俺を追ってきた部下共がいれば・・・！

だが壁はびくともせず、向こう側からの助けの声もなかった。ただ壁を叩く音だけが虚しく響く。

ちくしょう、こんなことになるならおとなしく授業でも特訓でも受けとくんだった。

後悔ばかりしていても始まらない。そう思い直して落ち着きを取り戻すために深呼吸をする。俺は王子だ。いずれ魔界の頂点に立つ男。こんなくらいで喚いていては格好もつかない。

よし、まずは現状把握が先決だな。ゆっくり部屋を見渡す。

その部屋は俺が予想したよりも大きく、真中にはチヨークで円がかかれてあった。ただの円じゃない。俺には解読不能な文字が円のまわりを囲うようにしてびっしり書き込まれていて、円の中には星。そう、魔方陣だ。周りには本棚があり、分厚い本、薄い本、大きいもの、小さいもの・・・埃をかぶっていた相当古い書物もあるし、まだ新品の買ったばかりのような本もあった。俺が一冊の本を手にとってみても書かれてる本はみんな異国の言葉でわからない。本棚の隣には拷問器具が並べてある。俺にとっては見慣れたものだが、

この拷問器具には乾いた血がこびりついてた。だめだな、こりゃあ。こういうのは手入れをしておかねえと使えなくなるんだ。乾いた血の跡を爪で軽くひっかき、俺は考えこんだ。

ここが何をするための部屋かはまだ定かではないが、魔方阵、異国の本、拷問器具。この三つのパスワードから考えられるのは、魔術師達が魔物を召還するのに最適の部屋であるということだった。

しかし、この時代に魔術師がまだ存在しているなんて聞いたこともない。

魔術師は大昔、この国を支配する種族だった。大きな街などでは魔術師が溢れかえり魔族の者は小さな村で細々と暮らしていた。魔術師達は強欲で新しい力を次々と欲しがった。権力や金を欲しがればかりに仲間同士で殺し合い、食らいあつた。そんな者達の末路が立派なわけがない。9世紀末、当時統治者だった魔術師、ウインストンは魔族の長であつた果敢なるベッドフォードに殺されその後魔術師達の種族はただ衰退の一路をたどるしかなかった。

後にベッドフォードは魔王となり、10世紀に入るころには魔族の時代がやってきた・・・と、これが俺が憶えている魔国の歴史だ。魔方阵に限っては本の絵でしかみたことがない。寧猛な魔物なら魔国にもたくさんいるが、魔族は力づくで魔物を従わせるのに対し、魔術師達は魔法を使って従わせ、魔物を支配下に置き魔方阵で呼び出す。魔物がいうことを聞かない場合、拷問器具を使うのは魔族も魔術師達も同じだ。俺が思うに魔術師達は貧弱だった。だって知る限りでは力仕事をしていない。

この部屋の持ち主も、そんな貧弱で哀れな魔術師だったんだろうか。だがここで大きな疑問がある。なぜこんな部屋が魔国に、しかもその拠点であるこの城の地下の奥深くにあるのか。いろいろな疑問が混ざり合い、重なり合う。

「こんにちは」

後ろから聞こえた声に俺は真面目に心臓が飛び出すかと思った。固まってしまって動けない。

背後に気配を感じる。この俺が、背後に立たれて気づかなかった！
？嘘だ、何かの間違いだ！

「ここ、僕の部屋だよ。なんでいるの？」

柔らかい子供の声に俺は幾分か安心し、警戒しながらも振り向いた。
そこには、おかしい格好をした幼い男の子が立っていた。

第4話 願い

「お前、立派な勇者になりたくないか？」

・・・はい？今なんかいったコレ。っつーか日本語しゃべれるのか。びっくりだぞ。

とりあえず襲われはしなさそうなので、勇気を振り絞って口を開く。がんばれ、俺。

「あなた、人間ですか・・・？」

なんとまあぶしつけな質問だ。百歩譲ってあなた誰ですか？だろう。でもまあ、このとき俺はこれまでに無いほどに混乱していたんだからしょうがない。うん。それに幸か不幸か相手はやっぱ人間じゃなかった。

「私は魔族の者だ。」

すごいだろう、といわんばかりに胸を張られても、困る。

魔族？何ソレ、食べ物？とかボケれたらどんなにいいだろうか。きつとそんな天然ボケな人がこの世にいたとしたらその人の人生はバラ色だろうな。

「はあ。」

「なんだ？その気の抜けた返事は。お前、ほんとに勇者か？」

いわせてもらうなら、俺は勇者じゃないし勇者になるともいってない。それに勇者ってのは魔族の敵なんじゃねえの。勇者に誘ってどうすんの。いやいやいやその前にこれどういう状況？

俺が軽く眩暈を憶えた、ちょうどそのときだった。なにが起こったって？

買い物にいった俺の母親が帰って来た！

玄関の扉が開く音が聞こえた瞬間、俺はその魔族とか言う奴の首根っこを引つ掴んでひっくり返ったソファーはそのままに、超猛スピードで俺の部屋へと続く階段を駆け上った。たぶんあれは最新記録だろうな。そいつは引つ掴まれてキーキーいいながら喚いていたが、この際かまっちゃいられない。

「健二ー？」

親の間延びした声が聞こえてきたが、そのときには俺は自分の部屋に駆け込み、後ろ手に鍵を閉めていた。あつぶねえ！

「健二！こんなに散らかして！片付けなさい！あなたはもう高校でしょ？だらしない。」

階段を登ってくる音がする。頼むから説教は後にしてくれ！

「だらしない！だらしない！」

俺の手にもっているちっさい生き物がクケケと笑う。手拍子までついていた。むっかつく。

「だれかいるの？友達？」

おおーっと今それどころじゃない。俺は甲高い笑い声をあげるそいつの口をに押さえて返事をした。

「うん、まあね。これから俺達勉強会やるからほつといて。後で片付けるから!」

最後の方なんか暴れまくるこいつを押さえ込むのに必死で息が荒かった。

「そう?ならいいけど。でも勉強するならちゃんとしなさいよ。」

降りていった。たすかった。とりあえず安心だ。

俺はそのちっさい奴が暴れようとするのを押さえてから、そいつと向き合った。なんかもう、俺の母親がきてからいろいと吹っ飛んだ。今はそんなにこいつが怖くない。少しだけ、好奇心さえある。

「私は魔族のニールだ。お前には協力してもらいたいことがある。もつとも、お前にできるかどうかが問題だが・・・。」

だからいちいちこいつむかつく!協力してもらいたいことあるんならまず礼儀つてものを教えてもらってこい!

怒鳴りたいのをこらえる。話がすすまねえ。

「で?」

「お前には、魔界を救ってもらおう勇者になってもらう。」

「・・・で?」

「いっておくが、拒否権はない。こつちがどれだけ必死でお前をさがしたか、分かるか?2年と3ヶ月!空間をさ迷いながら、魔王がいない平和な魔界を夢見て・・・。」

ニールは目にうつすらと涙をうかべながら語りだした。魔王にしいたげられる毎日、重労働で体がぼろぼろになった弟、一回開いた口はとどまることを知らず、ぺらぺらぺらと・・・。

あんたが苦労したのはわかったが、こっちはなにも知らないんだ。分かるわけないだろう!?

それをそのまま伝えたら、ニールは傷ついた顔をして言った。

「あんたには、心つてもんがないのか・・・?」

魔族にこんなことを言われた俺は、人間として失格だろうか。

とりあえず、詳しい状況説明プリーズ。なんか嫌な予感はあるけどな。

第5話 レイジェル

「こんにちは」

突然後ろから話しかけられた時は正直焦った。生まれてから15年間、魔王としての特訓を受けてきた俺が（まあときどきさぼって・ゴホン。）人の気配にきがかないなんてことはほとんどなかったからな。だからどんな凄い奴かとも思っただけで、予想外にもそいつはガキだった。なんだ、さっきのは俺が考えこんでたから気づかなかっただけか。

10、11歳くらいのやつで癖のある金色の髪が綺麗な子供だ。どこまでも透き通っているような青い瞳が印象的だった。

俺は少し焦ったことを知られなくて心の中に押し隠した。

「だれだ、お前」

「ここは僕の場所なのに勝手に入って来たのはあなたでしょ。それを聞きたいのは僕なんだけどな。」

なんだこいつ生意気に。だがこの小僧のいつていることも一理ある。俺は心の広い寛大な・・・って魔王に寛大もクソもねーな。

「わかった。俺はルイドだ。悪かったな、勝手にはいつちまって。だが俺も意図があつてここに来た訳じゃねえ。」

「意図があつた訳じゃない・・・？じゃあどうしてここに？僕はてつきり・・・ううん。」

首を大きくぶんぶん降るとそいつはほっとしたように溜息をついた。

「で、あんた誰だ？俺は名前いつただろ。」

「え？あ、えと、僕はレイジェルって呼ばれてるんだ。レイって呼んでもいいよ。」

さつきは少し警戒してた様子だったが、なぜか今は子供らしい年相応な無邪気な笑みを見せてくる。

ま、少なくとも敵ではなさそうだからそんなに邪険にしなくてもいいか。俺も小僧と同様警戒をといた。すこしでもびびった自分が馬鹿らしく思えたからだ。

すると、小僧が勝手にはしゃぎ始めた。俺の周りをぐるぐる回っている。

「ねえ、お友達になつてよ。お願い！僕、友達なんていないんだ。いいでしょ？」

・・・ま、悪くはない。こんなに人に好かれるのは初めての経験だ。相手が素直な好意を抱いてくれるのに断るなんてことはできない。それを伝えたらそいつは小躍りをし始めた。

「うれしいな、僕一人ですつとここに住んでたから寂しかったんだ。」

さてよ、住んでた？この部屋に？そういえばこいつはさつき何処から来たんだ？部屋には窓も入り口もない。

「ルイドはなにしてるの？このお城の召使いとか・・・執事とか？奴隷じゃないな、だってこんな綺麗な服着てるもの。」

お城。やつぱりここはまだ俺の城なのか、ここもさつきの地下ということになるが・・・その前にこいつはなにものなんだ？なぜ、こ

ここにいる？

「召使いも執事もこんな格好しないか。だってまるでこれ王子みたいな・・・」

この部屋はなんだ？何世紀も前の魔術師が使うような、薄気味悪い部屋でしかもこいつのおかしな格好・・・どこかで見たことがあると思っただら・・・

「もしかして・・・この城の・・・リチャード王の・・・」

小僧の顔から笑顔が消えていく。そして俺の顔からも。

警戒を解いたのはお互いに間違いだっただけだ。
なぜなら、こいつの格好は昔、古い歴史書の絵で見た、魔術師の格好そのままだったからだ。

第6話 幻と現実

諸君は、魔界という存在を信じているだろうか。俺は否だ。というかもう高校生にもなった奴がそんなことを言い出したらこいつ頭おかしいんじゃないかと周囲に思われるのが普通だ・・・よな？

だが俺はこの一時間の間に俺の常識は音を立てて崩れた。いや、崩れ始めている。

魔界からやって来たというなんか奇妙な小さい生き物。こいつが俺ん家のテレビからニユツと突き出てきたんだぜ。見事にホラーだった。その生き物は俺に語りかけてきた。俺は突然「勇者」というものになったらしい。

別に嬉しくともなんともねえや、魔界から来たやつに勇者になれなんて言われてもだれが信じるかよっつーのが正直な感想だ。でもこれがなんか必死なんだよな、現在の魔界の状況について力説し始めたとおもったら今度はむせび泣き始めた。俺は哀れに思うよりもむしろ階下にいる親に怪しまれるんじゃないかとひやひやした。いそいで泣きやませ、とりあえず話だけは聞いてやるか、と今俺たちは今むかいあつたところだ。

魔物（本人によるとニールというらしい）は涙を腕でごしごしとぬぐうと大きい黄色い目で俺を見た。どうやら俺から話し始めるのをまっっているらしい。

「あー・・・」

なんていえばいいんだ？こんな場合。

「その・・・なんで俺なんだ？」

「は？」

「いや、つまり勇者なんてものになるのになんで俺が選ばれたんだ

？」

俺は別に人一倍勇気をもっているわけでもねえし。なんか・・・勇者なんてめんどくさいし。

なあんか気まずくて目をそらして言った。だって向こうは泣くほど苦しい思いをして来たんだろ？俺は逃げてていいのか？俺はなんらかの理由で勇者に選ばれたんじゃないのか？アニメとか漫画ではみんなそうだ。やっぱり主人公がなにか特別な力を持っていて、選ばれるものと相場が決まっている。もしかしたら俺・・・

「ランダムだ」

「へえ」

なんか今瞬時にしてこの会話俺にとっての重要性がなくなってきた。

「へえ！ああそう！じゃあ俺はそのランダムに偶然選ばれたからこの変な生き物に突然泣きつかれたあげくくだらない話につきあわされてるんだ！うわあ感激！」

「な、なんだ？なにを怒ってる？それにくだらない話じゃない！真剣な話だ！！」

「真剣な話？俺にとっちゃお前らの世界で魔王がなにしようがどうでもいい！それに勇者がどうして俺達の世界の人間じゃないとだめなんだよ！？つか、ランダムをもう一回はじめからやり直せ！！これは何かの間違いだ！」

「いやだめだ。ランダムは一回決まったらもう取り消せない。動かないんだ。それに勇者の選択はどうしてもこの世界じゃないとだめ。何十年、何百年も前から決まっていたことだ。それより、落ち着いたらどうだ？」

「落ち着いてどうするんだよ！落ち着きでもしたら勇者候補おりれるってんならいくらでも・・・」

「健二！さつきからなに騒いでるの！もう少し静かにして頂戴！」

「はい！お母様！」

うおう！あ、あぶ、あぶねええ！予想以上に大声をだしてたみたいだ。こら、そこ！だから言ったのに・・・とかつぶやくんじゃねえ！

「もうご飯よ。お友達も一緒に食べてく？」

親が階段を登って来た。俺は猛烈に慌てた。こいつと居るところを見られたら大騒ぎになりそうだ。

だってこいつあきらか人間の風貌してないじゃん。あ、もしかしたら気味の悪い人形とか何かで誤魔化せるかも。

失礼なことを思いながらも俺はニールをベッドの下の隙間に押し込んだ。こら、騒ぐな。お願いだから！

母親がドアを開けて顔をのぞかせた。

「あら。お友達は？」

「ああ、えと・・・帰ったんだ。腹痛いからって帰ってつたよ」

苦しいか？苦しいだろうな。

「え？でも・・・」

「母さん！俺お腹すいたんだけど、今日の晩飯は？」

もうこれ以上踏み込んでこないでくれ！

俺は目の端でがたがた動いているベッドをとらえながら母さんを部屋の外に押しだしながら自分も部屋から出た。

朝。俺は比較的爽やかな朝を迎えた。あれから晩飯を食べて部屋にもどって来てみるとあいつの姿はなかった。ベッドの下にはなにもしなかったし部屋中探しても誰もいなかった。さっきのは幻だったのか？俺が寝ぼけてただけなのか？

いやでも俺がいそいでいたあまりベッドの上に放り投げたゲーム機はそのままであった。おかしいとは思ったが俺は気にしないことにした。さっきのは全部気のせいだったんだ。そうだ。魔界とか普通ありえないだろ？な？

なかば強制的に自分を納得させ、今に至る。いいよなあ。なんでもない毎日って。

「よ！」

「おう！」

後ろから声をかけられ振り向いたら、俺の親友がいた。隆人というみんなはタカとか、タカちゃんって呼んでるけどな。

「お前、今日機嫌いいな。いつもは悪いのに」

「おい、どういう意味だよ！」

笑って小突いてやると向こうも笑いながら俺から逃げだした。

「いや、お前っていつも寝起きは機嫌わりーからさ。気づいてなかったの？」

また少し走って俺から離れるとそう言った。

「お前だって時々そうだよ！」

なんか言い返せなかったのが悔しかったからそう言ってやった。

「いやいや俺はいつもこんなだよ」

「うそつけ」

「うそじゃないって」

「この前の朝お前機嫌悪かったじゃん。俺が話しかけても気の抜けた返事しかしなかったし」

「え？そうだつけ？」

「そうだよ、そういやあんときお前変だったよな。」

ついこの間、だったかな。あんときのタカはおかしかった。みんなそう言ってたし。一日中ずっと機嫌が悪かったみたいだ。授業では当てられても返事もしなかったし。先生でもクラスメートでも話しかけたら睨んできたし。いつもふざけてるようなタカが、だ。

「ええ・・・いつだよ？」

「だからこの前・・・一昨日？ぐらい」

「あ、俺そんな時熱あったんだよな・・・たぶん」

「なんだ。それでずっとイライラしてたんだな」

「俺、イライラしてた？」

「うん。ずっと。気づいてなかったのかよ」

「うーん、俺そんなときの記憶曖昧で憶えてねーや」

「意識飛ぶほど熱あったの!？」

それはあぶねーだろ・・・。事故にあいでもしたらやばかったな。

「大丈夫だよ。俺熱あるといつもそうなんの」

「じゃあお前が変な時は熱あんだな」

「そうそう」

「でもお前っていつも変だからな。見分けつかないじゃん。やっべ」
「なんだよ、喧嘩うってんのか!？」

「いーや？俺はいつもまじめで正直者だからさ」

「それこそ嘘だろ・・・」

気がつくともう学校だった。俺達はクラスが違ってから別れなきゃならない。前はずっと一緒だったタカと離れて少し寂しい。

「ま、大丈夫だって！俺達ずっと一緒だったじゃん」

笑ってタカはいつてくれる。ま、そうだよな。俺達幼なじみだし。ふとあの頭でつかちで黄色い目をした奴が頭に浮かんだが、追い出した。勇者になれ？魔王を倒せ？

冗談じゃない、俺はあいにくこの生活に満足している。ま、あれは幻だったし。いつまでもきにすんな、俺。

でもやっぱりあいつの顔が浮かんでは消え、消えては浮かぶ。

「お前、立派な勇者になりたくないか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5797e/>

勇者様と俺。

2011年1月23日14時35分発行